

## 『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「化学基礎」, 『化学』

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

## 「化学基礎」

## 1 前文

「化学基礎」は、物質とその変化に関わる基礎的な内容を扱い、日常生活や社会との関連を図りながら、化学が科学技術に果たす役割などについての認識を深めるとともに、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回の共通テストにおける「化学基礎」の受験者数は89,094人であり、前回より1,845人減少し、全受験者数の19.22%であった。基礎の他の科目と比較すると、「生物基礎」(114,187人)に次いで受験者数が多く、また、「化学基礎」の平均点は28.58点であった。

なお、評価に当たっては、「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」との共通テストの趣旨に基づき、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

## 2 内容・範囲

内容については、「科学の基本的な概念や原理・法則に関する理解を基に、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究する過程を重視する。」との、共通テスト問題作成方針(以下、「作成方針」)に基づき、思考力・判断力・表現力等を要する問題が多かった。

基礎的な知識を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスは適切であった。知識を問う問題では、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題のバランスについても十分配慮されていた。

範囲については、学習指導要領に示された範囲から出題されているが、作成方針に、「知識・技能や思考力・判断力・表現力等を新たな場面でも発揮できるかを問うため、教科書等で扱われていない資料等も扱う場合がある」と記載のあるとおり、「化学基礎」の教科書に記載されていない題材も扱われていた。これらの問題は、問題文や与えられた図を分析・解釈することによって対応できるように、工夫されていた。

第1問 学習指導要領に示された範囲からの小問集合形式の問題であった。

問1 原子の構造に関する知識を問う問題

問2 同位体に関する知識を問う問題

問3 混合物における含有率(質量パーセント(以下wt%とする))と原子量を組み合わせた思考問題

問4 酸化数に関する知識を問う問題

問5 身近な物質について、化学的性質を基に物質を特定する問題

問6 分子全体の極性の有無を問う問題

- 問7 溶解度について、グラフを活用して析出量を求める計算問題
- 問8 実験の基本操作について理解を問う問題
- 問9 弱酸の電離度を求める計算問題
- 問10 実験結果のまとめから、物質の量的関係を基に塩酸濃度の範囲を考察する思考問題
- 第2問 農業に不可欠である肥料をテーマとして、苦土石灰や肥料の三要素、石灰窒素法などを題材とした総合問題形式であった。いずれの問題もリード文による丁寧な説明と、与えられた化学反応式やグラフから思考する問題となっており、「化学基礎」で学習しない内容であっても、誘導に従って解答すれば十分理解できる内容であった。
- 問1 土壌改質に着目し、苦土石灰に含まれる成分に関連した元素の性質や、酸と塩基に関する問題
- a カルシウムとマグネシウムの性質に関する知識を問う問題
  - b 酸と塩基の強弱に関する知識を問う問題
- 問2 肥料の三要素に着目し、元素の含有率 (wt%) や、化学的性質に関する問題
- a 混合物について、構成物質の質量の割合の変化と構成元素の含有率 (wt%) の変化を関連付けて問う思考問題
  - b 化学的特徴を基に、物質を区別する実験操作について問う問題
- 問3 窒素肥料に着目し、酸化還元反応や石灰窒素に含まれる物質の含有率 (wt%) に関する問題
- a 石灰窒素法の化学反応を基に、酸化還元反応を見出す問題
  - b 信号強度のグラフを基に、石灰窒素におけるカルシウムシアナミドの含有率 (wt%) を求める計算問題

### 3 分量・程度

問題のページ数は14、大問数2、小問数13、解答数16（前回の共通テストはページ数12、大問数2、小問数12、解答数19）で、全体として解答数はやや減少した。第1問は小問集合形式であったが、出題範囲や分量は適切であったと思われる。また、第2問は、リード文やグラフから必要な情報を読み取り考察する総合問題であったが、時間内に全ての問題を解答することは可能であったと思われる。

平均点は、前回の27.00点（54.00%）に比べ28.58点（57.16%）とやや上昇した。全体的に、基礎的な知識を問う問題と思考力が求められる問題がバランスよく出題されており、難易の軽重について配慮されていた。一方、次に挙げる問題は難度が高かったと思われる。

#### 第1問

問10（正答率31.70%） 過不足のある化学反応について思考し、物質の量的関係についておよそその関係を見出すことができるかが問われた。リード文から実験操作を理解し、表から量的関係における過不足を見極めた上で、化学反応式を基に塩酸濃度の範囲として最も適当なものを選択するなど、複数の思考のプロセスが必要であったことから、正答率が低くなつたと考えられる。

#### 第2問

問2 a（正答率16.69%） 混合物について、構成する元素の粒子数の概念と質量の概念を関連付けて思考する、非常に難度が高い問題であった。化学式だけを捉えてしまい、混合物全体に占める元素の含有率 (wt%) まで思考が至らなかった受験者が多かつたと考えられる。

問2 b（正答率36.62%） 2種類の物質の区別において、区別できない実験操作を選択する問

題であった。なじみのない出題形式であり、幅広い正確な知識が必要となることから、正解にたどり着くことができなかつた受験者も少なからずいたのではないかと考えられる。

問3 b (正答率34.68%) 信号強度のグラフから試料中の窒素の質量を読み取り、組成式から含有率(wt%)を求める計算問題であった。グラフを読み取り、量的関係を見出し、含有率を計算するなど、複数の思考のプロセスが必要であったことが、正答率が低い要因になったと考えられる。

#### 4 表現・形式

全体として、問題文が分かりやすく理解しやすい表現が用いられていたことから、受験者にとって取り組みやすかつたと考えられる。初見と思われる題材については、丁寧なリード文で説明されており、受験者の負担を配慮したものとなっていた。また、問題文中に式量を表記したことも、計算が必要となる問題において、時間内の解答を可能とするための配慮となっていた。

形式としては、該当する項目を選択する問題(以下、項目選択)が7、該当する文章を選択する問題(以下、文選択)が3、計算が主体となる問題(以下、計算)が6(前回の共通テストは項目選択5、文選択4、計算7)で、前回と比較して項目選択が増加したものの、問題全体としてみるとバランスがとれた出題形式であった。計算が求められる問題においては、数値そのものを選んでマークする形式の問題は出題されなかつたが、概数を考察させる問題など目新しい形式のものが見受けられ、数的概念の深い理解が求められるなど工夫されていた。その一方で、含有率(wt%)に関連した問題が3問出題されており、出題形式の偏りが感じられた。

個別の問題について、特徴的な点は次のとおりであった。

第1問 小問集合形式で、幅広い範囲から出題された。

問3 試料中の鉄の含有率(wt%)を求めるシンプルな問題であるが、粒子概念と原子量の概念を横断的に問う深い思考を必要とする問題であった。粒子概念のみで解答する誤答が多かつたことから、このような深い思考を必要とする問題は、今後も継続を強く希望したい。

問7 溶解度は中学校「理科」でも学習するが、定着には課題があると考えられる。リード文と溶解度曲線から何を求められているのかを把握し、適切な数的処理を行うという基本的な問題であった。数的処理が複数の段階を伴うと難度が高くなる傾向にあるが、溶解度の学習には欠かせないプロセスである。中学校「理科」と高校「化学基礎」の学習が継続していることや、基礎基本に沿った学習を大切にするなど求められる。(正答率49.91%)

問8 蒸留装置を題材とした、実験操作の誤りを問う問題であった。このような出題は、高等学校で学習する「化学基礎」において実験を行ってほしいというメッセージであると捉えられる。実験操作を単なる知識として扱うのではなく、操作の意味を思考することで深い理解につなげることの重要性を示唆している問題といえる。

第2問 これまでと同様に、大問全体をとおして一つのテーマを設定し、そこから様々な題材を扱った総合問題形式であった。今回は、肥料として利用される物質に焦点を当てて出題された。「化学基礎」で扱わない物質や化学反応については、丁寧なリード文や化学反応式を踏まえて出題されており、受験者にとって理解しやすい内容となっていた。一方、総合問題形式ではリード文や図などが増加し受験者の負担となることから、形式については検討をお願いしたい。

問1 b 酸と塩基の学習において、化学式や強弱を正しく理解することは基本かつ重要である。

学習を進めるに当たって、中和滴定や塩の水溶液の液性、弱酸遊離や弱塩基遊離などの概念の理解をスムーズに行うことができるよう、基礎基本を定着させることが求められる。

問3 a 既知ではない化学反応が題材として出題されており、酸化還元反応の定義についての

理解が問われた。酸化数の増減だけを判断の根拠とするのではなく、化学反応全体を見て判断することが求められており、酸化還元反応における本質的な理解が問われた良問である。  
(正答率46.56%)

## 5 まとめ(総括的な評価)

共通テストの趣旨に基づき、報告書(本試験)15ページに記載の8項目の観点により、今回の共通テスト本試験の問題を検討した。

共通テスト6年目となる今回も、前回までに引き続き、「知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視」するため、全ての問題が「化学基礎」範囲内の考え方で解くことができるよう工夫され、受験者への配慮が見られる問題が作成された。また、マークシート式の解答方式という制約のある中で、適切に思考力・判断力・表現力等を問う問題が作成されていた。作問者の尽力に対して、深く敬意を表したい。

今回の共通テスト本試験の「化学基礎」では、前回までと同様に、第1問は小問集合形式、第2問は総合問題形式の問題が出題された。第2問は、主に肥料として利用される物質を題材とした問題構成となっており、第1問、第2問ともに「理科の見方・考え方を働かせ」、「物質とその変化を科学的に探究する」という学習指導要領の目標を踏まえた出題となっていた。

今後の試験問題の作成に対し、以下に意見をまとめ、提案・要望をしたい。

出題単元及び内容については、学習指導要領に記載されている、「化学と人間生活」、「物質の構成」、「物質の変化とその利用」の各項目から出題されていた。16問のうち、化学と人間生活から2問、物質の構成から6問、物質の変化とその利用から10問が出題された(重複を含む)。それぞれの単元で取扱う内容を踏まえ、幅広い学力層の受験者を識別できるよう出題量のバランスが取られていた。このようなバランスの取れた出題は、今後も継続をお願いしたい。

日常生活や社会と関連する内容については、身近な物質を題材とした問題が多く見られた。第1問では、物質を特定するために行った実験の結果から考察し、表現する問題が出題された。日常生活においても特徴や性質から物体や物質を特定することは身近に行われており、根拠を基に考察し表現するという、「化学基礎」の基本ともいえる内容であった。第2問では、大問全体にわたり、肥料として利用される物質が題材となっていた。4の表現・形式でも言及しているが、大学入学共通テストの継続性や「化学基礎」受験者の負担軽減、さらには「化学」の範囲を学習した受験者が有利とならないような出題の工夫などを考慮すると、総合問題形式にこだわらない出題方式の可能性も検討していただきたい。

計算問題は6問19点(前回7問23点)出題された。前回同様、複雑な計算を行わずに正答を導き出すことができる問題が出題された一方で、与えられた図や表、リード文から情報を整理し、計算を行って正解を導き出すという思考力を必要とする問題も出題された。これらの問題の解答には時間を要したと思われるが、あらかじめ式量が示されるなどの配慮が見られた。

今回の共通テスト本試験の「化学基礎」の平均点は28.58点(前回27.00点)であった。基礎の他の科目の平均点と比べると、「物理基礎」34.68点、「生物基礎」36.46点、「地学基礎」28.17点と、科目によって差が生じる結果となっている。問題の難易度については、基礎全体として平均点がほぼ同等になるよう、引き続き配慮をお願いしたい。

全体としては、前回同様、「知識・技能のみならず思考力・判断力・表現力等も重視」した、化学の本質について問うための工夫や配慮を十分に感じ取ることができる出題であった。

更なる創意工夫された良問の作成をお願いしたい。

## 『化学』

### 1 前文

「化学」は、物質やその変化に関する基本的な概念や原理・法則の理解を深め、原理・法則等を活用する能力を身に付けさせるとともに、理科の見方・考え方を働かせ、化学的な事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回の共通テスト本試験における「化学」の受験者数は181,584人であり、全受験者数463,535人の39.17%、「物理」,「化学」,「生物」,「地学」の全受験者数385,802人の47.07%が受験している。受験者は前回の共通テストの本試験183,154人より1,570人減少したが、「物理」,「化学」,「生物」,「地学」で比較すると最も多かった(2番目は「物理」で145,203人)。平均点は56.86点であり、前回の共通テストの平均点(45.34点)と比較しておよそ11点あまり増加した。

「大学への入学志願者を対象に、高等学校等の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし」、「各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする」との共通テストの趣旨に基づき、以下の3項目を評価の視点として、分析と検討を行った。更に「まとめ」として、高等学校の授業改善への影響や、共通テストへの意見・要望などを含めた、総合的な評価を行った。

#### (1) 内容・範囲

問題内容は適切か/知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスの取れた出題か/学習指導要領に定める範囲内の出題か/出題内容に極端な偏りはなく適切か

#### (2) 分量・程度

試験時間に照らして適切な分量か/設問数・文字数等は適切な量か/問題の難易度は適切か

#### (3) 表現・形式

学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、教科・科目の本質に照らし適切か/設問形式や配点は適切か/文章表現・用語は適正か/図表や写真の扱いは適切か

なお、評価に当たっては、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

### 2 内容・範囲

内容については、令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針(以下「作成方針」という。)にのっとり、「科学的に探究する過程を重視」した問題が含まれていた。

出題のバランスであるが、過去の共通テスト及びセンター試験における問題評価・改善の蓄積が生かされており、全体的に文字数が適切であり、問題設定も十分に理解できるものが多かったことなどから、多くの受験者が時間内に正答にたどり着くことができたと推察される。基礎的・基本的な知識・理解を問う問題だけでなく、思考力・判断力・表現力等を多角的に問う問題も多く含まれており、幅広い学力層の受験者の学力を測定できる構成として適切であったと考えられる。

範囲については、「物質の状態と平衡」,「物質の変化と平衡」,「無機物質の性質」,「有機化合物の性質」,「化学が果たす役割」から幅広く出題されており、学習指導要領に示された範囲を網羅していた。また「化学基礎」の学習内容と関連のある問題が4問あった。加えて、日常生活や社会と関連付けた問題も複数出題されており、このような題材は、「化学」の学習が「化学基礎」から連続していることだけでなく、身のまわりの自然現象や生活のあらゆる場面に学習内容が関連しているこ

とを伝える受験者へのメッセージとなる。引き続き、今後も出題を検討していただきたい。

第1問は、主に「物質の状態と平衡」からの出題であった。

問1 高等学校で学習する基礎的・基本的な知識や理解を問う問題であり、学習してきた内容の定着を問う形式の出題は、今後も継続していただきたい。

問4 六方最密構造について、平面図から、立体的な原子の位置関係を思考させる問題であったが、正答にたどり着けない受験者もある程度見られた。目に見えない粒子を想像して捉えることは物質の構造の理解のために不可欠であると考えられる。

問5 アルコールロケットを題材とした問題であり、実際にその実験を見たことのない受験者でも、丁寧な説明文と図により、条件を理解しやすかった。問5 bでは、設定された数値に工夫がみられ、条件を整理し、立式することができれば、計算自体はそれほど難易度が高くなかった。このような身近な現象に関する問いは、授業改善にも活かすことができると考えられることから、継続的に扱う意義のある出題内容であると考えられる。

第2問は、「物質の変化と平衡」からの出題であった。

問3 実験結果を基に反応速度定数を求める基本的な問題であり、実験結果を分析する上で必要な知識・技能等が問われる問題であった。実験を行い、その結果を分析・解釈することは化学を学習する上で不可欠である。実験結果を数的に処理するような問いは、今後も出題の継続を検討いただきたい。

問4 a (正答率32.94%) 塩の加水分解について問う基本的な問題であった。「化学基礎」の内容を発展させたものであるが、受験者の知識が十分に定着していないことが考えられるため、「化学基礎」の知識の定着を問う形式の出題は、今後も継続していただきたい。

問4 c (正答率37.33%) 酸と塩基の溶液を様々な条件で混合した溶液から緩衝液としてはたらく溶液を見出す問題であり、溶液中の粒子の様子を思考し、判断することが求められる共通テストとしてふさわしい良問であった。教科書に記載された、弱酸(弱塩基)とその塩の混合溶液という組み合わせをそのまま当てはめるのではなく、中和反応も踏まえて正答を導き出すことは、化学の本質的な理解を促すものであり、授業改善にも活かすことができる。

第3問は、主に「無機物質の性質」からの出題であった。

問1, 問2, 問4 いずれも正答には正確な知識が必要であった。化学反応や物質の性質について、正確な知識を理解しておくことは化学の学習において大切である。

問5 b (正答率33.35%) 金属イオンの系統分離に関する問題であった。示された分離操作を基に、どの金属が分離されるのかを問うのではなく、金属が分離された結果を基に、分離操作の組み合わせを問う問題であった。十分な条件理解と思考が必要とされたため、正答率は低かった。金属イオンの分離について、水溶液を加える順序と分離される金属イオンを機械的に覚えていた受験者が多かったのではないかと考えられる。このような出題を継続していただくことが高等学校での授業改善につながるメッセージになるのではないだろうか。

第4問は、「有機化合物の性質」からの出題であった。

問2 条件を満たす物質を取捨選択する問題であり、分子式から不飽和結合の数を思考したり、反応から構造を導き出したりするなど、基本的な知識を組み合わせ活用する必要があった。このように複数の知識を融合させて思考させる問いについては、直接的に知識を問う問題とのバランスを考慮しながら、引き続き出題を検討していただきたい。

問3 異性体についての基本的な知識を問う問題であったが、正答率はさほど高くはなかった。受験者の構造異性体、立体異性体についての用語の理解が十分ではないと考えられる。

問5 a グルタチオンという、多くの受験者になじみのない物質の性質を構造から判断する問

題であった。有機化合物や高分子化合物では、構造上の特徴から性質等を類推する思考が不可欠であり、良問であったといえる。

問5 b 各pHにおけるグリシンの構造を問う基本的な問題であったが、グラフを読み取り、条件を整理する必要がある。このようなグラフ等で示された情報を精査する必要がある問題は、受験者の学力を正しく測定するために必要不可欠であると考えられる。

第5問は、「化学が果たす役割」を基に、身のまわりに使われている化学物質を題材とした総合問題であり、複数の大項目における学習を踏まえて出題されていた。

問2 ポリイミドという多くの受験者になじみのない物質についての問題であったが、解答する上で必要な構造式や反応機構等を整理して示す工夫がなされていた。問2 aは、化学反応前後の構造から中間構造を類推する問題であり、加えた物質とその後の反応を示すことで、多くの受験者が正答にたどり着くことができたと考えられる。問2 bは、構造式や反応機構から原料を類推する問題であったが、いずれも化学の本質的な理解を促すものである。

問3 b (正答率30.12%) 過不足ある物質の平衡から平衡定数を計算する基本的な問題だが、正答率が低かった理由として、一定の条件下での反応のみを理解している受験者が多かったのではないかと考えられる。このような出題を継続していただくことが高等学校での授業改善につながるメッセージになるのではないだろうか。

### 3 分量・程度

大問5問構成であった。また、小問数は前回の共通テスト本試験と同じであった。その中には計算問題が7問あり、前回から4問減少した。グラフが掲載された問題は1問であり、前回から3問減少した。問題のページ数は29ページで前回(33ページ)より減少しており、リード文の長さも適切であった。問題の設定を理解するための時間も考慮された問題が多かったことから、時間内に全ての問題を解答することは十分に可能であったと思われる。

難易度が極端に高い問題は見られなかった。第2問の間4 a, 4 c, 第3問の間5 b, 第5問の間3 bのように、正答率が低い問題は、複数の思考を組み合わせた題材であった。このような問題は受験者の思考力を測る問題としてふさわしく、学力の高い受験者を識別するために必要であると考えられるため、今後も、難易度について慎重に検討をいただいた上で、出題を継続いただきたい。

第1問の間3, 第2問の間1, 第3問の間2, 第4問の間1, 問4, 第5問の間1 aは、教科書にそのまま記載されている基礎的・基本的な知識や理解を問うものであった。思考力や判断力等を問う問題も大切ではあるが、そのような難易度の高い問題に取り組むためには、基礎的・基本的な知識・理解が大切であるということを受験者へ再確認させるメッセージだと考えられる。ただ、第5問の間1 b (正答率37.79%)のように受験者にとってやや一般的ではない知識を問う問題の出題については、慎重な検討をお願いしたい。また、第1問の間1, 第2問の間4 a, 第3問の間1, 問3は、「化学基礎」で学習した知識・理解や概念を含む、又は、応用した問題となっていた。「化学」の学習においては「化学基礎」が土台であり、数的処理能力も含めてしっかりと身に付けた上で学びに向かいたい。

### 4 表現・形式

第1問から第5問まで、作成方針に示されている「高等学校の段階において身に付けた基礎的な力を問う」ための問題という作問のねらいにおおむね沿っていた。これまで指摘されていた、問題の設定や選択肢の表現が受験者にとってやや分かりづらかったり、文章が長かったりといった点に対し、適切な配慮がなされた問題が多かった。計算問題の分量も適切で、比較的計算しやすい値が

設定されていた。受験者に余りなじみのない問題については、分かりやすい図とリード文で内容が示されるなど、受験者への配慮も多数見受けられた。これまで指摘されていた点を踏まえ、引き続き改善していただいたことに感謝を申し上げる。

受験者の思考力や判断力等を識別する問題としては、リード文をしっかりと読んだ上で与えられた条件を理解し、容器内の圧力や反応速度定数、高分子化合物の構造などを問う問題が出題されていた。学習指導要領には、「観察、実験などを通して探究し、(中略)規則性や関係性を見いだして表現すること」とある。反応等の条件を踏まえ、これまで学習した概念や原理・法則を活用して規則性や関係性を見出し、結果を推測して表現するという学習活動は、深い学びの実現のために必要不可欠な要素である。このような学習活動を題材とした出題は、受験者の思考力や判断力等の識別に十分資するものと考えられる。一方で実験結果のグラフを読み取ったり、方眼紙に受験者がグラフを書いたりするような問題が余り出題されていなかったため、そのような出題形式についても是非検討していただきたい。

## 5 まとめ(総括的な評価)

共通テストの意義として、幅広い学力層の受験者の学力を定量的に測定できることが理想である。また、「物理」、「生物」、「地学」との平均点及び標準偏差ができるだけ近くなることが望ましい。今回の共通テストでは、「化学」の平均点は56.86点、標準偏差は23.17であったのに対して、「生物」の平均点は55.01点、標準偏差が19.20であり、平均点をみると大きな差はなかった。これまで、「化学」の難易度が高いという指摘が繰り返されてきたが、文章量や条件設定等が精査され、適切な難易度に設定された出題であったといえる。

今回の共通テスト「化学」の本試験は、出題分野に偏りがなく、出題された問題の多くが学習指導要領に準拠した問題であった。また、思考力や判断力等を要する問題や、文字数が多く読解に時間を費やしたと考えられる問題についても、全体的なバランスが調整されており、高く評価できる。試験問題に十分に余裕をもって向き合い、根拠をもって解答することが大切であり、そのための時間を確保することについて、今後の出題においても慎重な検討をお願いしたい。

全体の構成は、例年と同様に、第1問から第4問までは分野別の出題であったが他の分野の内容に関する出題も含まれており、第5問は分野横断型の総合的な問題となっていた。加えて、配点についても全ての大問で均一(20点)であった。これまでと大問構成に変化はなかったことから、受験者にとって大きな混乱はなかったと思われる。学習指導要領では有機化合物及び高分子化合物の分野は「有機化合物の性質」としてまとめられているが、高分子化合物については、第5問の総合問題で身のまわりに使われている化学物質の問題として出題されており、共通テストとしてバランスの取れた問題構成となっていた。

共通テスト「化学」の作問に当たっては、出題範囲及び内容は学習指導要領の範囲内であり、学習が身近な現象から専門的な領域へと連続していることをうかがわせる良問が多く含まれていた。幅広い学力層の受験者の学力を正しく測定できる問題構成となっており、高等学校での授業や受験者の学び方に一石を投じる出題も見られたことから、そのような問題については今後も引き続き、出題を検討していただけるよう申し上げたい。末筆ながら、作問された方々が幾度も議論を重ねてこられたことに対しても大きな感謝を申し上げたい。